

独身

森鷗外

青空文庫

壺

小倉の冬は冬という程の事はない。西北の海から長門の一角を掠^{かす}めて、寒い風が吹いて来て、蜜柑^{みかん}の木の枯葉を庭の砂の上に吹き落して、からからと音をさせて、庭のあちこちへ吹き遣^やつて、暫^{しばら}くおもちゃにしている、とうとう縁の下に吹き込んでしまう。そういう日が暮れると、どこの家でも宵のうちから戸を締めてしまふ。

外はいつか雪になる。おりおり足を刻んで駈けて通る伝^{でん}便^{びん}の鈴の音がする。

伝便と云つても余所よそのものには分かるまい。これは東京に輸入せられないうちに、小倉へ西洋から輸入せられている二つの風俗の一つである。常磐橋ときわばしの袂たもとに円い柱が立っている。これに広告を貼はり附けるのである。赤や青や黄な紙に、大きい文字だの、あらゆる筆使いの画だのを書いて、新らしく開あけた店の広告、それから芝居見せものなどの興行の広告をするのである。勿論柱はただ一本だけであつて、これに張るのと、大門町の石垣に張る位より外ほかに、広告の必要はない土地なのだから、印刷したものより書いたものの方が多い。画だつても、巴里パリの町で見る affiche 《アフイツシュ》のように氣の利いたのはない。しかし兎とに角かく広告柱があるだけはえらい。これが一つ。

今一つが伝便なのである。Heinrich 《ハインリヒ》 von 《フオン》 Stephan 《ステファン》 が警察国に生れて、巧に郵便の網を天下に布しいてから、手紙の往復に不便はないはずではあるが、それは日を以て算し月を以て算する用弁の事である。一日の間の時を以て算する用弁を達するには、郵便は間に合わない。Rendez 《ランデ》-vous 《ヴウ》 をしたって、明日何処あすどこで逢あおうなら、郵便で用が足る。しかし性急な変で、今晚何処どこで逢あおうとなつては、郵便は駄目である。そんな時に電報を打つ人もあるかも知れない。これは少し牛刀鶏きを割く嫌きらがある。その上嚴いめしい配達いの為方しかたが殺風景である。そういう時には走はし使つかが欲しいに違ちがひない。会社の徽章きしょうの附いた帽かぶを被かつて、辻つじ々に立たつていて、手紙を

市内へ届けることでも、途中で買つて邪魔になるものを自宅へ持つて帰らせる事でも、何でも受け合うのが伝便である。手紙や品物と引換に、会社の印の据^すわっている紙切をくれる。存外間違はないのである。小倉で伝便と云っているのが、この走使である。

伝便の講釈がつい長くなった。小倉の雪の夜に、戸の外の静かな時、その伝便の鈴の音がちりん、ちりん、ちりん、ちりんと急調に聞えるのである。

それから優しい女の声で「かりかあかりか、どっこいさのさ」と、節を附けて呼んで通るのが聞える。植物採集に持つて行くよな、ブリキの入物に花^{かりんとう}欄糖を入れて肩に掛けて、小^{こちようちん}提灯を持つて売つて歩くのである。

伝便や花欄糖売は、いつの時候にも来るのであるが、夏は辻つじう占ら売なんぞの方が耳に附いて、伝便の鈴の音、花欄糖売の女の声は氣に留まらないのである。

こんな晩には置炬燵おきこたつをする人もあろう。しかし実はそれ程寒くはない。

翌朝手水鉢ちようずばちに氷が張っている。この氷が二日より長く続いて張ることは先ず少い。遅くも三日目には風が変る。雪も氷も融とけてしまうのである。

式

小倉の雪の夜の事であつた。

しんうおのまち

新魚町ゆたかの大野豊ゆたかの家に二人の客が落ち合つた。一人は裁判

ごましおあたま

所長の戸川という胡麻塩頭ごましおあたまの男である。一人は富田という市病

院長で、東京大学を卒業してから、この土地へ来て洋行の費用を

たくわ

貯えているのである。費用も大概出来たので、近いうちに北川と

いう若い医学士に跡を譲つて、出発すると云つてゐる。富田院長

も四十は越してゐるが、まだ五分刈頭に白い筋も交まじらない。酒好ずき

ちよつと

だということが一寸見ても知れる、太つた緒あからがお顔まじの男である。

ごくたんぱく

極澹泊な独身生活をしてゐる主人は、下女の竹に饅飩うでんの玉を

買つて来させて、台所で煮させて、二人に酒を出した。この家で

は茶を煮るときは、名物の鶴つるの子こより旨うまいというので、焼芋を買

わせる。常磐橋の辻から、京町へ曲がる角に釜かまを据えて、手拭てぬぐいを被った爺じいいさんが、「ほっこり、ほっこり、焼立ほっこり」と呼んで売っているのである。酒は自分では飲まないが、心こころ易やすい友達に飲ませるときは、好すきな鰻鮓うなぎを買わせる。これも焼芋の釜の据えてある角から二三軒目で、色の褪さめた紺暖簾こんのれんに、文六と染め抜いてある家へ買いに遣やるのである。

主人は鰻鮓うなぎだけ相伴して、無頓着むとんじやくらしい顔に笑えみを湛たたえながら、二人の酒を飲むのを見ている。話はしめやかである。ただ富田の笑う声がおりおり全体の調子を破って高くなる。この辺は旭町あさひの遊廓あそびが近いので、三味さみや太鼓の音もするが、よほど鈍く微かになつて聞えるから、うるさくはない。

竹が台所から出て来て、鰻鮓の代りを勧めると、富田が手を揮ふつて云った。

「もういけない。鰻鮓はもう御免だ。この家にも奥さんがいれば、僕は黙って鰻鮓で酒なんぞは飲まないのだが。」

これが口火になって、有妻無妻という議論が燃え上がった。この部屋で此等これらの人の口からこの議論が出たのは、決して今夜が初めではない。

主人が帝国採炭会社の理事長になって小倉に来てから、もう二年立った。その内大野の独身生活は小倉で名高いものになっていて、随って度々問題に上る。

主人は全く女というものなしに暮らしているのだろうか。富田

もこの問題のために頭を悩ました一人である。そこでこう云った。
「どうも小倉には御主人のお目に留まったものがなさそうだ。多
分馬関ばかんだろうと思って、僕は随分熱心に聞いて廻ったのだが、結
果が陰性だった。」

「随分御苦労なわけだね」と、遠慮深い戸川は主人の顔を見て云
った。

主人はただにやりにやり笑っている。

富田は少し酔っているので、論鋒ろんぼうがいよいよ主人に向いて来
る。「一体ここの御主人のような生活をしていられては、周囲まわりの
女のために危険で行けない。」

「なぜだい、君。」

「いつどの女とどう云う事が始まるかも知れないんだからね。」

「まるで僕が Don 《ドン》 Juan 《ホアン》 でもあるようだ。」

戸川は主人のために気の毒に思つて、半ば無意識に話を外へ転じようとした。そして持前のしんねりむつつりした様子で、妙な話をし出した。

参

戸川は両手を火鉢に翳^{かざ}して、背中を円くして話すのである。

「そりやあ独身生活というものは、大抵の人間には無難にし遂げにくいには違ない。僕の同期生に宮沢という男がいた。その男の

卒業して直ぐの任地が新発田^{しばた}だったのだ。御承知のような土地柄だろう。裁判所の近^{きんじよ}処に、小さい借屋をして、下女を一人使っていた。同僚が妻を持てと勧めても、どうしても持たない。なぜだろう、なぜだろうと云ううちに、いつかあれは吝^{りんしよく}嗇^{さく}なのだということに極^きまつてしまったそうだ。僕は書生の時から知っていたが、吝嗇^{りんしよく}ではなかった。意地強く金を溜^ためようなどという風の男ではない。万事控目で踏み切ったことが出来ない。そこで判事試補の月給では妻子は養われないと、一^{いち}匁^{ちづ}に思っていたのだらう。土地が土地なので、丁度今夜のような雪の夜が幾日も幾日も続く。宮沢はひとり部屋に閉じ籠^{こも}って本を読んでいる。下女は壁^{ひとえ}一重隔てた隣の部屋で縫物をしている。宮沢が欠^{あくび}をする。下女が

欠を噬^かみ殺す。そういう風で大分の間過ぎたのだそう。そのうちある晩風雪^{ふふぎ}になつて、雨戸の外では風の音がひゅうひゅうとして、庭に植えてある竹がおりおり箒^{ほうき}で掃くように戸を摩^する。十時頃に下女が茶を入れて持つて来て、どうもひどい晩でございますねというような事を言つて、暫くもじもじしていた。宮沢は自分が寂しくてたまらないので、下女もさぞ寂しかろうと思ひ遣^やつて、どうだね、針^{はりしごと}為事をこつちへ持つて来ては、己^{おれ}は構わないからと云つたそう。そうすると下女が喜んで縫物を持つて来て、部屋の隅の方で小さくなつて為事を始めた。それから下女が、もうお客様もございますまいねと云つて、おりおり縫物を持つて、宮沢の部屋へ来るようになったのだ。」

富田は笑い出した。「戸川君。君は小説家だね。なかなか旨い^{うまい}

。」

戸川も笑って頭を掻いた。「いや。実は宮沢が後悔して、僕にあんまり精しく^{くわ}話したもんだから、僕の話もつい精しくなったのだ。跡は端折^{はしよ}って話すよ。しかも一つ具体的に話したい事がある。それはこうなのだ。下女がある晩、お休なさいと云って、隣の間へ引き下がってから、宮沢が寐られないでいると、壁を隔てて下女が溜息をしては寝返りをするのが聞える。暫く聞いていると、その溜息が段々大きくなつて、苦痛のために呻^{しんぎん}吟するとうような風になったそうだ。そこで宮沢がつい、どうかしたのかいと云った。これだけ話してしまえば跡は本当に端折るよ。」

富田は仰山な声をした。「おい。待ってくれ給え。ついでに跡も端折らないで話し給え。なかなか面白いから。」声を一倍大きくした。「おい。お竹さん。好く聞いて置くが好いぜ。」

始終にやにや笑っていた主人の大野が顔を蹙めた。

戸川は話し続けた。「どうも富田君は交まぜつ返すから困る。兎とに

角かくそれから下女が下女でなくなつた。宮沢は直ぐに後悔した。職

務が職務なのだから、発覚しては一大事だと思つたといふことは、

僕にも察せられる。ところが、下女は今まで包つつましくしていたの

が、次第にお化粧をする、派手な着物を着る。なんとなく人の目

に立つ。宮沢は気が気でない。とうとう下女の親許もとへ出掛けて行

つて、いづれ妻にするからと云つて、一旦いったん引き取らせて手当を

遣っていた。そのうちにどうかしようと思ったが、親許が眞面目まじめなので、どうすることも出来ない。宮沢は随分窮してはいたのだが、ひと算段をしてでも金で手を切ろうとした。しかし親許では極まった手当の外のものほかはどうしても取らない。それが心しんから欲しくないのだから、手が附けられない。とうとうその下女を妻にして、今でもそのままになっている。今は東京で立派にしているのだが、なんにしろ教育の無い女の事だから、宮沢は何かに附けて困っているよ。」

富田は意地きたなげに、酒をちびちび飲みながら冷かした。

「もうおしまいか。竜頭蛇尾だね。そんな話なら、誉めなけりや
あよかった。」

四

この時戸口で、足踏をして足駄の齒に附いた雪を落すような音がする。主人の飼っている Jean 《ジャン》 という大犬が吠えそうにして廃^よして、鼻をくんくんと鳴らす。竹が障子を開けて何か言う声がする。

間もなく香染^{こうぞめ}の衣を着た坊さんが、鬚^{ひげ}の二分程延びた顔をして這入^{はい}つて来た。皆の顔を見て会釈^{わき}して、「遅くなりまして甚^{はなは}だ」と云いながら、畳んだ坐具を右の脇^{わき}に置いて、戸川と富田との間の処に据わった。

寧国寺ねいこくじさんという曹洞宗そうとうしゅうの坊さんなのである。金田町の鉄道線路に近い処に、長い間廃寺のようになっていた寧国寺という寺がある。檀家だんかであつた元小倉藩の士族が大方豊津とよつへ遷かえつてしまつたので、廃寺のようになったのであつた。辻堂を大きくしたようなこの寺の本堂の壁に、新聞反古ほんごを張つて、この坊さんが近頃住まつているのである。

主人は嬉しそうな顔をして、下女を呼んで言い附けた。

「饅頭がまだあるなら、一杯熱くして寧国寺さんに上げないか。お寒いだろうから。」

戸川は自分の手を翳していた火鉢を、寧国寺さんの前へ押し遣つた。

寧国寺さんはほとんど無間断むげんだんに微笑を湛たたえている、瘦やせた顔を主人の方に向けて、こんな話をし出した。

「実は今朝たくはつ托鉢たくはつに出ますと、豎町たての小さい古本屋に、大智度論たいちどろんの立派な本が一山積み重ねてあるのが、目に留まったのですな。

どうもこんな本が端本はほんになつているのは不思議だと思ひながら、

こちらの方へ歩いて参つて、錦町にしきの通を旦過橋たんかばしの方へ行く途中

で、また古本屋の店を見ると、同じ大智度論が一山ここにも積み重ねてある。その外法苑珠林ほうおんじゆりんだの何だのと、色々あるのです。

大智度論も二軒のを合せると全部になりそうなのですか。」

主人は口を挟んだ。「それじゃあわざと端本にして分けて売つたのでしよう。」

「お察しの通りです。どこから出たということも大概分かっていきます。どうかすると調べたくなる事もある本ではあるし、端本にして置けば、反古にしてしまわれるのは極きまっていますから、いかにも惜しゅうございますので、東禅寺の和尚に話して買うて置いて貰うことにして来ました。跡に残っている本のうちには、何か御覧になるようなものもあるかと思いましたが、一寸ちよつとお知らせに参りました。」

「それは難ありがと有う。明日あした役所から帰る時にでも廻って見ましょう。さあ。饅飩が冷えます。」

寧国寺さんは饅飩を食べるのである。暫くすると、竹が「お代りは」と云つて出て来た。そしてお代りを持って来るのを待つて、

主人は竹を呼び留めた。

「少しこの辺^{へん}を片附けて、お茶を入れて、馬関の羊羹^{ようかん}のあつたのを切つて来い。おい。富田君の処の徳利は片附けてはいけな

い。

「いや。これを持って行かれては大変。」富田は鰕^{えび}のようになつた手で徳利を押えた。そして主人にこう云つた。

「一体御主人の博聞強記は好^いいが、科学を遣っているくせに仏法の本なんかを読むのは分からない。仏法の本は坊様が読めば好いではないか。」

寧国寺さんは饅飩をゆつくり食べながら、顔には相変らず微笑を湛えている。

主人がこう云った。「君がそう思うのも無理はない。医書なんぞは、医者でないものが読むと、役には立たないで害になることもある。しかし仏法の本は違うよ。」

「どうか知らん。独身でいるのさえ変なのに、お負まけに三宝に帰依きえしていると来るから、溜まらない。」

「また独身攻撃を遣り出すね。僕なんぞの考では、そう云う君だつてやつぱり三宝に帰依しているよ。」

「こう見えても、僕なんかは三宝とは何と何だか知らないのだ。」

「知らないでも帰依している。」

「そんな堅白けんぱく異同いどうの弁を試みたつていけない。」

主人は笑しょうだん談だんのような、真面目まじめのような、不得要領な顔をし

てこんな事を言った。

「そうでないよ。君は科学科学と云っているだろう。あれも法なのだ。君達の仲間で崇拜している大先生があるだろう。 *Authoriteten* 《アウトリテエテン》だね。あれは皆仏なのだ。そして君達は皆僧なのだ。それからどうかすると先生を退治しようとするねえ。 *Authoritaeten* 《アウトリテエテン》-*Stuermerei* 《スチュルメライ》というのだね。あれは仏を呵^かし祖^のを罵^のるのだね。」

寧国寺さんは羊羹を食べて茶を喫^のみながら、相変わらず微笑している。

富田は目を据えて主人を見た。

「またお講釈だ。ちよいと話をしている間にでも、おや、また教えられたなと思う。あれが苦痛だね。」一寸顔を蹙めて話し続けた。

「なるほど酒は御馳走になる。しかしお肴が饅飩と来ては閉口する。お負にお講釈まで聞せられては溜まらない。」

主人はにやにや笑っている。「一体仏法なぞを攻撃しはじめたのは誰だろう。」

「いや。説法さえ廃して貰われれば、僕も謗法はしない。だがね、君、独身生活を攻撃することは廃さないよ。箕村の処なん

ぞへ行くと、お肴が違ふ。お梅さんが床の間の前に据わつて、富田に馳走をせいと儼然^{げんぜん}として御託宣があるのだ。そうすると山海の美味が前に並ぶのだ。」

「分らないね。箕村というのは誰だい。それにお梅さんという人はどうしてそんなに息張^{いば}つているのだい。」

「そりや息張つていますとも。床の間の前へ行つて据わると、それ、御託宣だと云うので、箕村は遙か下がつて平伏するのだ。」

「箕村というのは誰だい。」

「箕村ですか。あの長浜へ出る処に小児科病院を開いている男です。前の細君が病気で亡くなつて忌中っていると、ある日大きな鯛^{たい}を持つて来て置いて行つたものがあつたそうだ。箕村がひどく驚

いて、近所を聞き廻ったり何かして騒ぐと、その時はまだ女中でいたお梅さんが平気で、これはお稲荷様いなりさまの下さった鯛だと云つて、直ぐに料理をして、否いやおう唯なしに箕村に食わせたそうだ。それが不思議の始で、おりおり稲荷の託宣がある。梅と婚礼をせいと云う託宣なんぞも、やつぱりお梅さんが言い渡して置いて、箕村が婚礼の支度をする、お梅さんは驚いた顔をして、お姫よめさんはどちらからお出いでなさいますと云つたそうだ。僕は神慮かなに称なづつて見えて、富田に馳走をせいと云う託宣があるのだ。」

「怪しい女だね」と戸川くちばしが嘴くちばしを容れた。

「なに。御馳走になるから云うのではないが、なかなか好いい細君だよ。入院している子供は皆懐なついている。好く世話をして遣やるそ

うだ。ただおりおり御託宣があるのだ。」

寧国寺さんは、主人と顔を見合せて、不断の微笑を浮べて聞いていたが、「お休なさい」と云つて、ついと起つた。見送りに立つ暇いとまもない。

この坊さんはいつでも飄ひよう然ぜんとして来て飄然として去るのである。

風の音がひゅうと云う。竹が藥缶やかんを持つて、急須きゆうすに湯を差しに来て、「上はすっかり晴れました」と云つた。

「もうお互に帰ろうじゃないか」と戸川が云つた。

富田は幅の広い顔に幅の広い笑を見せた。「ところが、まだなかなか帰られないよ。独身生活を *berufsmaessig* 《ベルウフスメエ

シヒ》に遣つてゐる先生の退却した迹で、最後の突撃を加えな

けりやあならないからな。箕村だつてそうだ。僕は何故なにゆえにお稲

荷さんが、特に女中をしていたお梅さんをばつてき抜擢したかというこ

とまで、神慮に立ち入つて究めることは敢てあえしない。しかし兎に

角第二の細君が直ぐに出来たのは、箕村のために幸福であつた。

箕村は一日も不自由をしない。箕村のお客たる僕なんでも不自由

をしない。主人が幸福なら、客も幸福だ。」

主人の無頓着むとんじやくらしい顔には、富田がいくら管を巻いてもやは

り微笑の影が消えない。

戸川は主人に目食めくわせをした。「いや。大變遅くなつた。もう

お暇いとまをします。」

そして起ちそうにして起たずに、頻りに富田を促すのである。
 「さあ。君も行こうじゃないか。もう分かつているよ。分かつて
 いるよ。」

戸川はとうとう引き摩ずるようにして富田を連れ出した。

富田は少しよろけながら玄関へ出て、大声にどなっている。

「おい。お竹さん。もう一本熱いのを貰うはずだが、こん度の晩
 まで預けて置くよ。」

主人は送りに出て、戸川に囁ささやいた。「車を呼びに遣ろうか。」
 「なに。どうせ同じ道ですから、僕が門まで一しよに行きます。
 さようなら。」

六

二人の客の帰った迹は急にあとひっそりした。旭町の太鼓はいつか止んでいて、今まで聞えなかった海の鳴る音がする。

竹が出て来て、酒や茶の道具を片附けている。主人の大野は、見るともなしにそれを見ていたが、ふいと竹を女として覗ようとした。

背の低い、髪の薄い、左右の目の大きさの少し違っている女である。初め奉公に来た時は痩せて蒼い顔をしていて、しおらしいような処があつた。それがこの家に来てから段々肥えて、頬ほつぺたが膨らんで来た。女振はよほど下がつたのである。

宿元は小倉に近い処にあるが、兄が博多はかたで小料理屋をしている。
 飯めしたき焚なんぞをするより、酌でもしてくれば、嫁入支度位は直ぐ出来るようにして遣ると、兄が勧めたので、暫く博多に行つていたが、そこへ来る客というのが、皆マドロスばかりで、ひどく乱暴なので、恐れて逃げて歸つたのだそうだ。裏表のない、主人のためを思つて働く、珍らしい女中である。しかし女として視ることはむずかしい。これまで一度も女だと思つたことがなかったが、今女だと思おうとしても、それがほとんど不可能である。異性のものだという感じは所詮しよせん起らなかった。

道具を片附けてしまつて起つて行くのを、主人は見送つて、覚えいぶかず微笑した。そして自分の冷澹れいたんなのを、やや訝いぶかるような心持

になった。

この心持が妙に反抗的に、自分のどこかに異性に対する感じが潜んでいはいないかと捜すような心持を呼び起した。

大野の想像には、小倉で戦死者のために法会をした時の事が浮ぶ。本願寺の御連枝ごれんしが来られたので、式場の天幕の周圍まわりには、老若男女がぎしぎしと詰め掛けていた。大野が来賓席の椅子いすに掛けていいると、段々見物人が押して来て、大野の膝ひざの間の処へ、島田に結いった百姓の娘がしゃがんだ。お白いと髪かみの油あぶらとの匂においがする。途中まで聞いていた誰たれやらの演説が、ただ雑音のように耳に聞えて、この島田に掛けた緋鹿子ひかのこを見る視官と、この髪や肌から発散する匂きゆうを嗅かぐ嗅か覺かくとに、暫くの間自分の心が全く奪うばわれてい

たのである。この一刹那せつなには大野も慥たしかに官能の奴隷であつた。

大野はその時の事を思い出して、また覚えぬ微笑した。

大野は今年四十になる。一度持った妻に別れたのは、久しい前の事である。独身で小倉に來ているのを、東京にいるお祖母ばばあさんがひどく案じて、手紙をよこす度によめ姫の詮議せんぎをしている。今宵こよひもそのお祖母あさんの手紙の來たのを、客があつたので、封を切らずに机の上に載せて置いた。

大野は昏くらくなつたランプの心を振ねじ上げて、その手紙の封を開いた。行儀の好いいお家流の細字を見れば、あの角縁つのぐちの目金を掛けたお祖母あさんの顔を見るようである。

歳暮もおひおひ近く相成あいなりそうち候へば、御上京なされ候日の、指折

る程に相成候を楽しみ居り候。前便に申上候井上の嬢さんに引き合せくれんと、谷田の奥さんが申され候ゆゑ、今日上野へまゐり、
ただいま只今歸りてこの手紙をしたため候。私と谷田の奥さんにて先に参りをり候処へ、富子さん母上と御一しよに來られ、車を降りて立ち居られ候高島田の姿を、初て見候時には、実に驚き申候。世の中にはこの様な美しき人もあるものかと、不思議に思はれ候程に候。この人を見せたらば、いかに女嫌の御前様もいやとは申さるまじと存じ候。性質は一度逢ひしのみにて何とも申されず候へども、れいり伶俐なることはたし慥かに候。ただ一つ不思議に思はれしは、茶店に憩いこひて一時間ばかりもゐたるに、富子さんは一度も笑はざりし事に候。丁度西洋人の一組同じ茶店にゐて、言語通ぜざ

るため、色々をかしき事などありて、谷田の奥さん例の達者なる英語にて通弁をして遣つかされ、富子さんの母上も私も笑ひ候に、富子さんは少しも笑はずにをられ候。もつとも尤前便に申上候通、不幸なる境遇に居られし人なれば、同じ年頃の娘とは違ふ所もあるべき道理かと存じ候。何は兎ともあれ、御前様の一日も早く御上京なされ候て、私の眼鏡の違たがはざることを御認なされ候を、ひたすら待入候。かしこ。

尚なおなお々精次郎夫婦よりも宜よろしく可もうしあぐべきよう申上様申出候。先日石崎に申附候亀甲万きつこうまん一樽たるもはや相届き候事と存じ候。

読んでしまった大野は、竹が机の傍そばへ出して置いた雪洞ほんぼりに火を附けて、それを持って、ランプを吹き消して起った。これから

独^{ひとり}寝^ねの冷たい床に這^{はい}入^いってどんな夢を見ることやら。

（明治四十三年一月）

青空文庫情報

底本：「普請中 青年 森鷗外全集2」ちくま文庫、筑摩書房

1995（平成7）年7月24日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版森鷗外全集」筑摩書房

1971（昭和46）年4月～9月刊

初出：「スバル」

1910（明治43）年1月

※誤植を疑った箇所を、「鷗外選集 第二巻」1978（昭和53）年12月22日第1刷発行の表記にそって、あらためました。

入力：鈴木修一

校正：松永正敏

2003年8月20日作成

2016年2月6日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

独身

森鷗外

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>